

5

参考事例

地区の個性と魅力を高めるために、参考設計以外のデザインでサインに採用する場合の参考となる事例を紹介します。

(参考事例1) 関内・山手・みなとみらい21地区サイン

目的

関内地区は、安政6年(1859年)の開港以来、常に横浜の政治・経済の中心であり、近代文化発祥の地として発展を遂げてきました。そのため、本地区には、行政や企業の中核管理機能、商業機能、文化・観光資源などが集積しており、また歴史的な建造物も数多く残されている場所です。

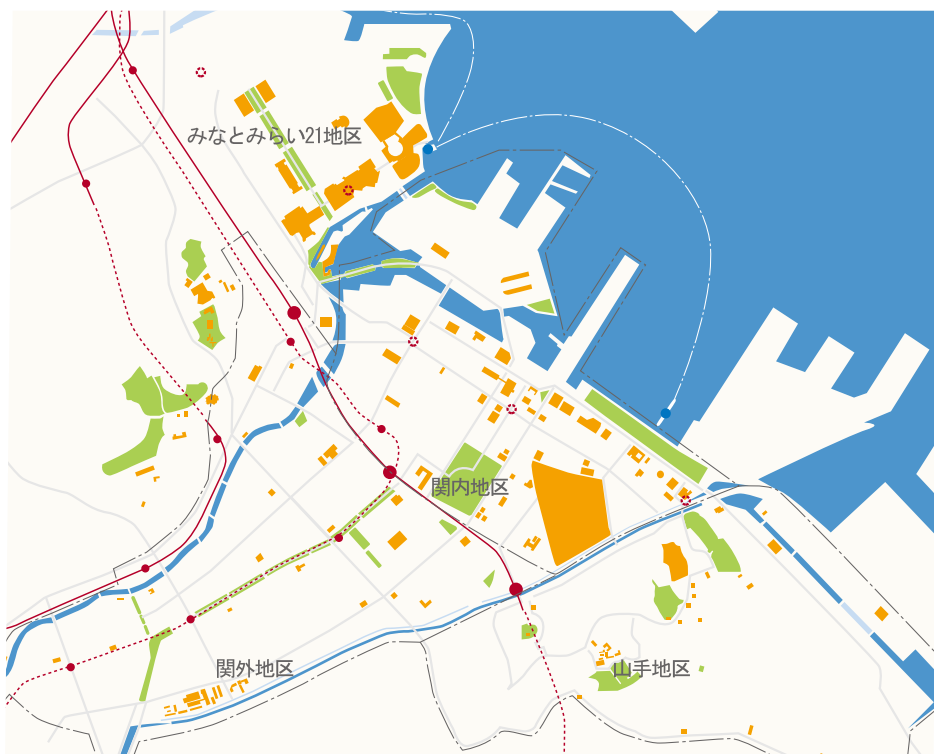
サイン計画の目的として以下の2点が挙げられます。

- 1 本地区に来訪する様々な人に対し、街をわかりやすくする。
- 2 関内・関外地区、みなとみらい21地区、山手地区の3地区に渡り回遊性を高める。

ここでは、関内地区・山手地区・みなとみらい21地区を例にサイン計画の流れを紹介します。

街の構造・施設分布

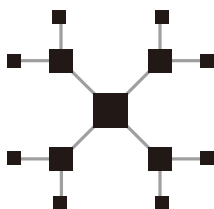
案内・誘導対象施設の分布と、都市構造(道路・鉄道網)を見てみると、関内地区は地区全域にわたり、密度の高い分布が見られます。山手地区は、山手本通りを軸に施設が分布しています。みなとみらい21地区は、歩行者モールを中心として地区全域に各施設が分布しています。



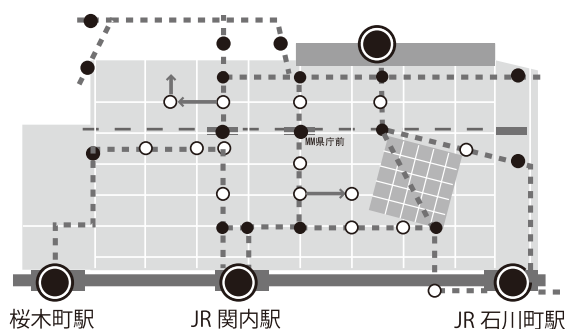
凡例

- 歩行ルート
- ◎ 大拠点 (全体案内図、周辺案内図、施設誘導、広域交通情報)
- 中拠点 (周辺案内図、施設誘導)
- 誘導拠点 (施設誘導)

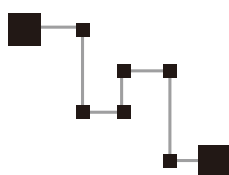
サインシステム～階層配置
関内地区



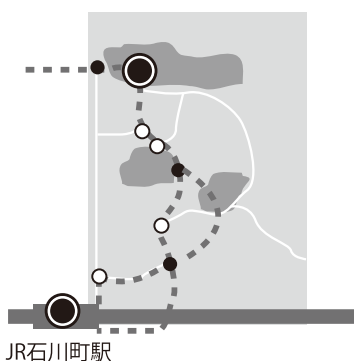
関内地区は、行動起点が、桜木町駅、関内駅、石川町駅であり、目的地となる施設は多岐にわたっています。そのため階層配置によって、駅から、主要交差点、施設直近の交差点までを、案内・誘導情報にヒエラルキーをつけたサインシステムとしました。



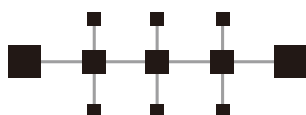
サインシステム～線状配置
山手地区



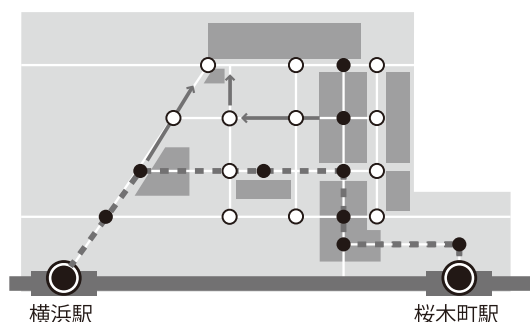
山手地区は、石川町駅を起点とし、港の見える丘公園を終点と位置づけ、その間のルートが山手本通り 1 本のため、線状配置のシステムとしました。



サインシステム
～階層 + 線状配置
みなとみらい 21 地区



みなとみらい 21 地区は、桜木町駅と横浜駅の 2 駅間をむすぶ歩行者デッキ (インナーモール) を主軸とした線状配置システムに加え、主軸上の拠点から各施設へ誘導を行う階層配置システムです。



(事例 1 - 1) 関内地区サイン

案内・誘導のシステム

大拠点となる駅前に、市都心部全域の地図と、広域の交通案内図を併設し、総合的な情報案内を行いました。また主要な交差点である中拠点には周辺案内図を設置し、その他交差点には矢羽型誘導サインを設置しています。

地図サイン更新のシステム

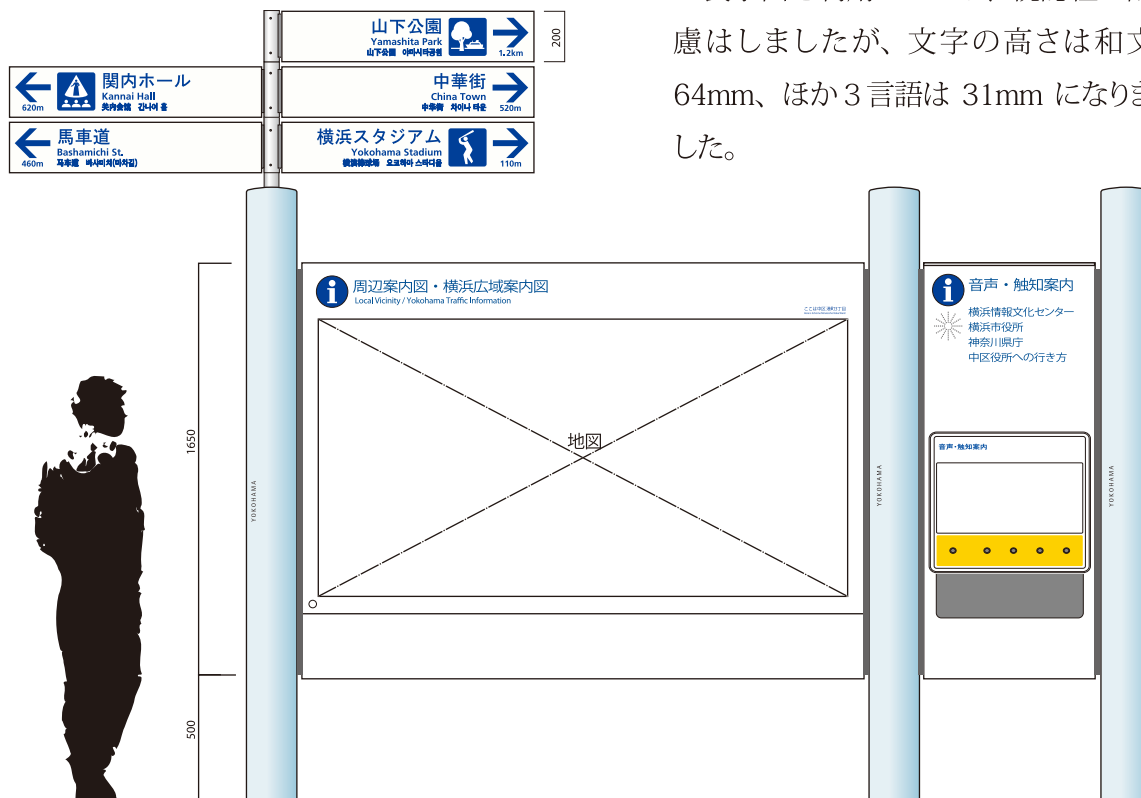
関内のような都心部では、地図内の情報の変化が多く、年1回程度情報更新が必要です。そのため、関内地区の地図サインは、本体をガラスのケースとして、中に地図を印刷したマイラー紙（耐水性のある樹脂系の紙）を貼る構造としました。これによって、印刷手間、貼り手間が従来のサインより安価になり、情報更新が容易になります。

誘導サインの文字高

誘導サインを設定するにあたり、当初設計では、街路のスケールから考慮し、利用者の視認距離を15～20mとしました。そのため、文字の高さは和文70mm、英文42mmとしました。

4言語表記に変更するにあたり、既存の表示面を利用したため、視認性に配慮はしましたが、文字の高さは和文64mm、ほか3言語は31mmになりました。

関内地区サイン姿図一覧 Scale=1/30



大拠点（JR 関内駅前タイプ）音声・触知・案内図付き

(音声・触知案内サイン)
 駅前の行動起点に視覚障害者、子ども、高齢者に対して、誘導ブロックルート案内する、音声・触知案内図を設けています。

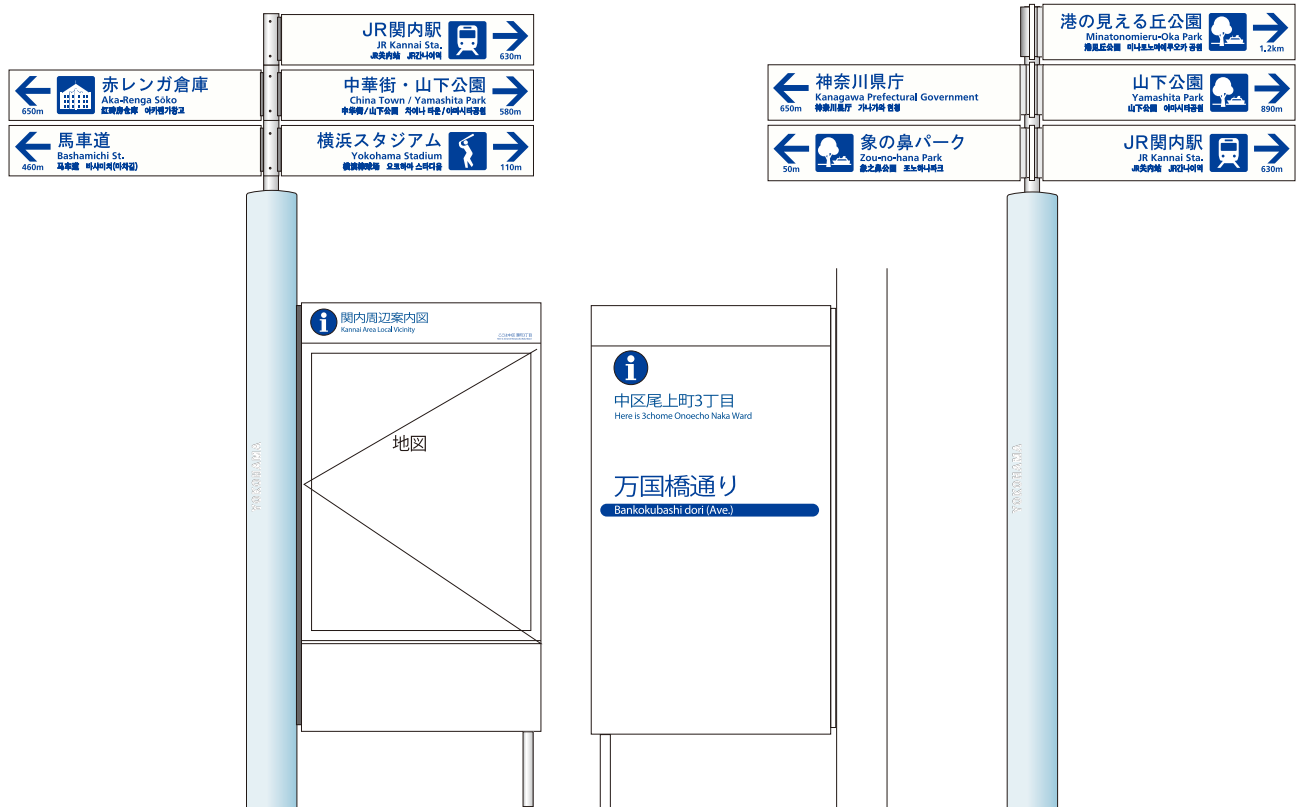


触知案内図
 素材：人工大理石

音声用ボタン
 施設の音声案内

音声用ボタン
 案内板の使い方説明

触知案内サインについては、各福祉団体等の意見をふまえて検討してきたものですが、機能的に十分とはいえない部分もあり、研究中の試験的な方式として位置づけています。



中拠点

中拠点裏面

誘導拠点 (矢羽タイプ大)

(事例 1 - 2) 山手地区サイン

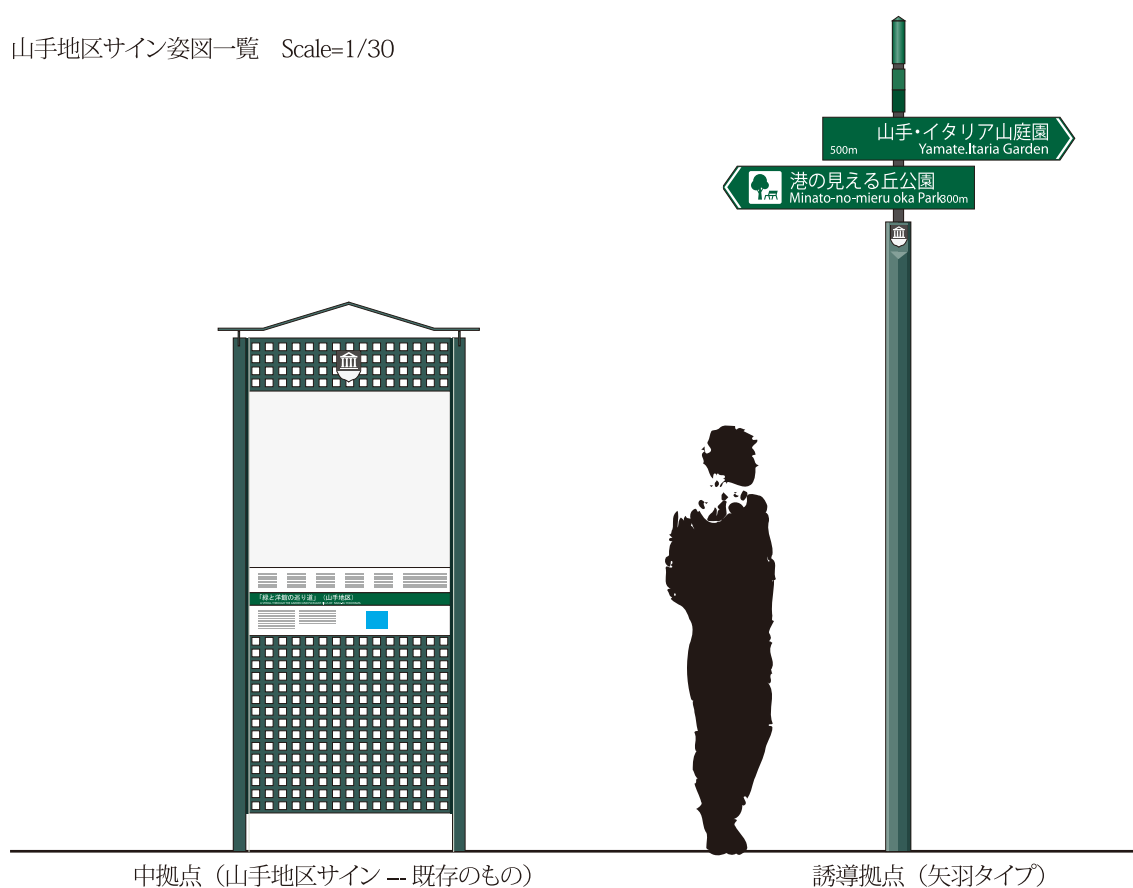
案内・誘導のシステム

山手地区は、案内サインがルート上に整備済みであったため、誘導サインを追加し、石川町駅から港の見える丘公園までのルート上の案内誘導機能を補完しました。

サインデザイン

既存の案内サインとの調和と、山手らしさを意図し、クラシカルな矢羽形状の表示板と六角断面の柱としました。

山手地区サイン姿図一覧 Scale=1/30



(事例 1-3) みなとみらい 21 地区サイン

案内・誘導のシステム

みなとみらい 21 地区は、歩行者の主軸となるペDESTリアンルートを含め、階層的な情報提供を行います。

また、地元の街づくり組織と連携しながら案内・誘導サインの設置・更新をしていきます。

サインデザイン

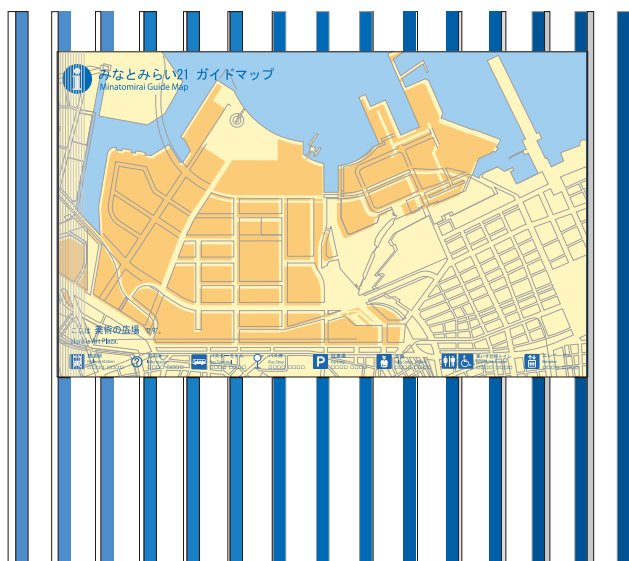
既存の案内・誘導サインとの整合を考慮し、サインカラーには「MMブルー」が基調色となるようデザインしました。

一方、既存サインの文字誘導サインは、矢羽タイプへ変更するとともに、地図サインについては、見やすさや必要な情報量を確保するため、表示範囲を拡大しました。

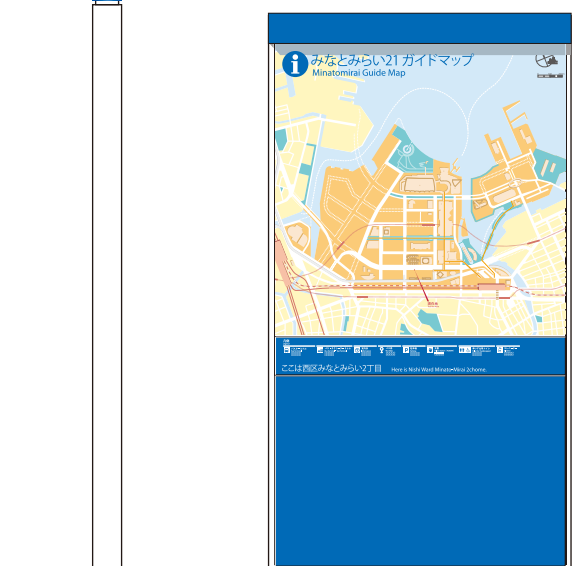
誘導サインの文字高

みなとみらい 21 地区については、当初、誘導サインの文字高を設定するにあたり、歩行者空間の広さや街区の大きさを考慮し、和文 80mm、英文 48mm としました。4 言語表記移行にあたり、既存の表示面を利用したため、視認性に配慮はしましたが、文字の高さは和文 80mm、ほか 3 言語は 34mm になりました。

みなとみらい 21 地区サイン姿図 Scale=1/30



大拠点（周辺図 + 地区内案内図）



誘導拠点（矢羽タイプ）

中拠点（地区内案内図）

(参考事例2) 新横浜周辺地区サイン

目的

新横浜周辺地区は JR 東海道新幹線、JR 横浜線、市営地下鉄などの交通拠点であり、その歩行圏内に日産スタジアム、横浜アリーナといった大規模集客施設や、横浜労災病院、横浜市総合リハビリテーションセンターなどの医療施設を配しており、街区全体の道路整備と一体となった来街者のスムーズな誘導、案内機能の整備が望まれていました。

本計画ではサインを「情報コミュニケーションのメディア」としてとらえ「情報内容」「表現様式」「空間上の位置」についての検討を重ね、以下の目的でサインの整備を行いました。

- 1 大規模施設および鉄道駅への動線を道路上で明確化する
- 2 新横浜周辺地区のまちの構造を知らしめ、まちの座標軸、オリエンテーションの理解を促す
- 3 インフラストラクチャーに必要な、まちの情報提供機能を整備する
- 4 視覚障害者や外国人を含めた、だれもがわかりやすいサインを整備する

地区の特徴

新横浜周辺地区の大規模施設は、日産スタジアムや横浜アリーナ、横浜労災病院などです。JR 新横浜駅から日産スタジアムや横浜アリーナに至る歩行圏内に商業地区が広がり、ホテルや民間の博物館、スポーツ施設等が散在しています。

鳥山川を越えると、日産スタジアムの手前に横浜労災病院や横浜市総合リハビリテーションセンター、横浜ラポールなどの医療福祉ゾーンがあります。日産スタジアムの周辺は、長期計画に基づく多目的遊水池を兼ねた新横浜公園の整備が進められています。

システム構成の考え方

新横浜周辺地区の主要な動線は、日産スタジアム、横浜アリーナ、横浜労災病院などの大規模施設（目的地）と、JR 新横浜駅、地下鉄新横浜駅、JR 小机駅、地下鉄北新横浜駅の各鉄道駅（出発点）を結んで形成されています。

この地区における歩行者系サインシステムは、上記の主要な動線上の分岐点および屈曲点に矢羽型誘導サインを配置して動線上の情報ニーズに応えるとともに、人通りの多い交差点位置には、情報コーナーサインを配置して新たに発生する情報ニーズを補完する構成としました。情報コーナーサインは矢羽型よりも視距離の小さい対面視型誘導サインと周辺案内図からなります。

[基本的なシステム構成] Scale=1/30



特殊な場所における対応

鉄道駅前広場の情報コーナーサインは対面視型誘導サインと周辺案内図に加え、表示範囲の広い地区案内図を設置しました。また主要動線上の立体横断施設位置では誘目性を高めるため矢羽型誘導サイン・大を設置しました。

誘導サインの文字高

サイン種別	想定視距離	和文文字高	英・中・ ハングル文字高
矢羽型誘導サイン	15～20m	100mm	42mm
矢羽型誘導サイン・大	20～25m	97mm	60mm
対面視型誘導サイン	1～10m	54mm	22mm

[特殊な場所における対応] Scale=1/30



■鉄道駅前広場の情報コーナーサイン

- 対面視型誘導サイン
- 周辺案内図
- 地区案内図

■矢羽根誘導サイン・大

○配置基準：主要動線上の立体横断施設位置

案内地図事例

広域交通案内図



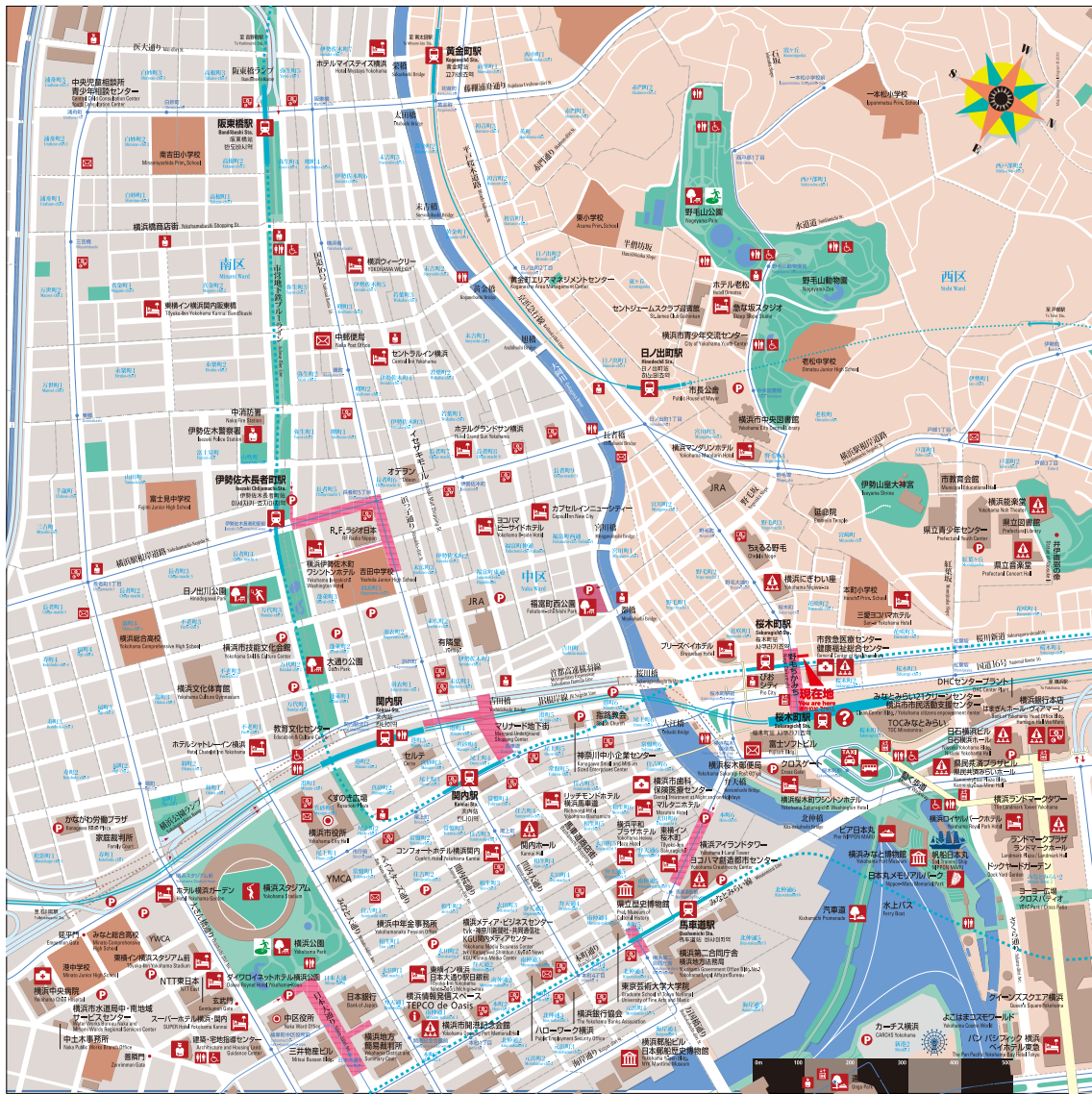
(原寸地図サイズ 1110×650)

関内地区
周辺案内図



(原寸地図サイズ 890×890)

関外地区
周辺案内図



(原寸地図サイズ 900×900)

みなとみらい 21 地区
地区案内図



(原寸地図サイズ 1120×1120)

新横浜地区

周辺案内図

新横浜周辺地区サイン
約 1.5km 四方
900mm×900mm



地区案内図

新横浜周辺地区サイン
約 2.5km 四方
900mm×900mm



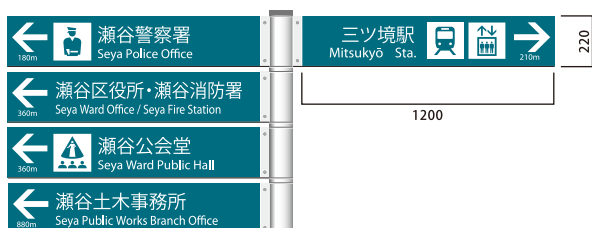
(参考事例3) 三ツ境駅周辺地区サイン

三ツ境駅周辺地区のサイン整備は、平成19年3月策定の「三ツ境駅周辺地区交通バリアフリー基本構想」において、駅から主要公共施設への案内サイン等の新設・改善が位置づけられたことから着手されました。

誘導ルート

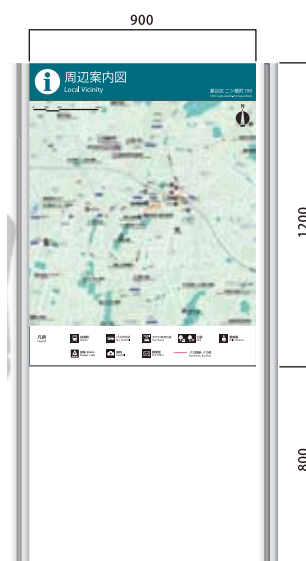
三ツ境駅周辺地区は、駅を中心に500m圏内に瀬谷区役所や瀬谷警察署、1km圏内に養護学校やせや活動ホーム太陽などの教育・福祉施設があります。また、駅から南方向へ1km余りのところに、区外からの来訪者も多い長屋門公園があります。これらの分布からバリアフリー化を図る経路と誘導すべき施設を絞り込み、駅を起点とする4つのルートを次のように決定しました。

誘導サイン (矢羽型)



- 1 せやまる・ふれあい館へのルート
- 2 瀬谷区総合庁舎へのルート
- 3 せや活動ホーム太陽へのルート
- 4 長屋門公園へのルート

案内サイン (自立型)



他事業者との調整

サイン整備は駅改札を出たところからはじまりますが、駅直近部は、サイン設置場所の施設管理者が複数います。そこで、瀬谷区区政推進課が事務局となって関係者に協力を求め、「三ツ境駅周辺地区案内サイン等設置管理事業者連絡会」を立ち上げました。鉄道事業者、駅ビル管理者、バス事業者、行政（瀬谷区役所・道路局）等からなり、サインの設置、管理、修正、更新にかかる調整の役割を担います。また、当会の規約では、1つ1つのサインについて管理者や経費負担について明記しました。これにより情報更新等が責任をもって行われる仕組みができあがりました。

【整備概要】

整備時期 平成 20 年 3 月～平成 24 年 3 月
案内サイン 6 基
誘導サイン 22 基
案内サイン・誘導サイン（一体型） 3 基
整備担当課 瀬谷区役所ほか民間事業者

誘導サイン・案内サイン（自立型）



1225×1250
S=1/20

(参考事例 4) 戸塚駅西口地区サイン

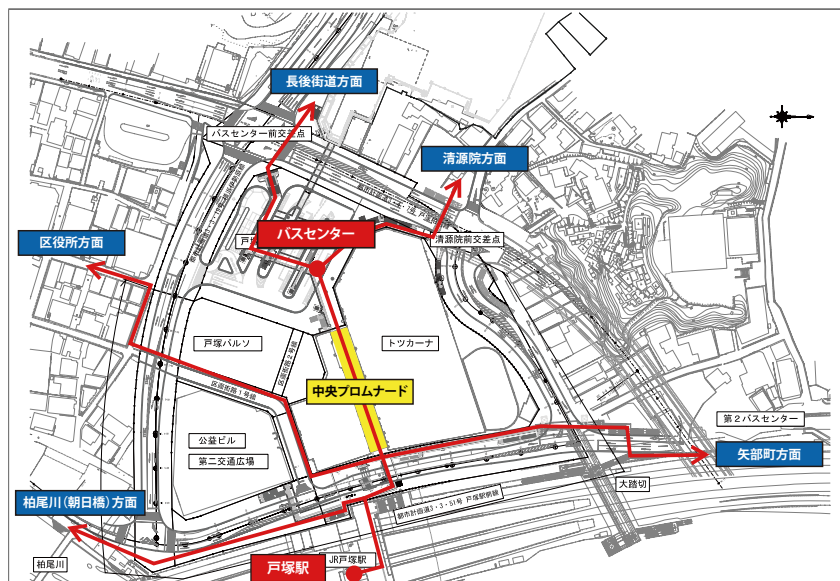
戸塚駅西口第1地区第二種市街地再開発事業は、共同ビル「トツカーナ」や第1交通広場（戸塚西口バスセンター）を整備する第1段階（平成22年4月オープン）、公益施設（区役所、区民文化センター）を整備する第2段階（平成25年2月工事完了予定）を経て事業完了となります。開発規模もさることながら、これらの段階的整備により、サイン計画は暫定的な表示を含むなど非常に複雑なものとなりました。加えて、歩行者誘導の起点となる戸塚駅の改札が地下1階と3階に、戸塚西口バスセンターの乗り場が2階にあるなど、レベル間の移動をいかにわかりやすく円滑に誘導していくかが課題となりました。

誘導ルート

駅からバスセンターへ誘導するメインルートに加え、周辺地区の各方面（矢部町方面、清源院方面、長後街道方面、柏尾川（朝日橋）方面、区役所方面）への誘導ルートを設定しました。

駅とバスセンターをつなぐメインルートは、共同ビル「トツカーナ」内の中央プロムナードを通り抜ける必要があります。そのため、共同ビル側と協力し、連続した誘導となるよう案内計画を立てました。

誘導ルート図



他事業者との調整

駅地下改札からの誘導では、方面別誘導のほかに駅構内から地上への出口誘導を連続して行うため、鉄道事業者と表示情報やサインの下地色の調整を行いました。

また、バス事業者と調整し、本市が整備する板面にバス事業者がバスの乗り場案内・時刻表を掲示するという方法をとりました。

供用後の状況

供用開始後の状況として、再開発により駅周辺の歩行者動線が抜本的に変わったこと、利用者に高齢者が多いことから、利用者の要望を受けて、主な施設を誘導する路面に貼るタイプの大きなサイズのサインを追加しました。

【第1段階 整備概要】

整備時期 平成 22 年 2 月～ 4 月

案内サイン (総合案内板) 7 基

誘導サイン (天吊型、壁取付型、高欄取付型など) 44 基

触知サイン (案内サインに併設) 3 基

その他 (エレベータ停止階施設案内など) 29 基

整備担当課 都市整備局戸塚駅周辺開発事務所再開発課



表示面：高耐候性インクジェット印刷

表示面：高硬度・高耐候印刷

